

ダニエル書にあらはれた歴史哲學

小田 丙 午 郎

筆者は本論文に於て意圖するものはダニエル書にあらわれた歴史哲學の究明である。

これをする前に筆者は一應ダニエル書の舊約聖書に於ける地位、ダニエル書の著者とその時代的背景に就て紹介しなければならぬ。以下これを以て序論に代える。

(一) ダニエル書の舊約聖書に於ける地位

舊約聖書は邦譯によれば三十九卷を包蔵している。これは併しギリシヤ譯即ち ^註Lxx に従つたもので、ヘブル原典は二十四卷を収録している。一方舊約聖書は律法 (Torah)、預言 (Nabim) と聖文學 (Ketubim) の三部に分類される事もここに附記されねばならない。そうして律法には創世記出埃及記レビ記民數記略申命記の所謂モーセの五書が屬し預言には前預言書としてヨシュア記士師記サムエル書列王紀略と後預言書としてイザヤ書エレミヤ書エゼキエル書十二預言が含まれ聖文學には詩篇箴言ヨブ記雅歌ルツ記哀歌傳道書エステル書、ダニエル書、エズラ、ネヘミヤ書記歴史略が加えられる。

ダニエル書にあらはれた歴史哲學

律法預言書聖文學の三つは舊約聖書を構成し正經 (Canon) とされた。併し一五四六年トレント (Trent) 會議に於て從來の正經が更に増補された。此の補修された部分は所謂舊約外典 (apocripha) でありこれを文學様式から一般に黙示文學 (Apocalyptic literature) と呼ばれている。ダニエル書は嚴密に云えば黙示文學に屬するものと云わねばならない。ダニエル書は云わば正經に取入れられた唯一の黙示文學である。因に一五四六年のトレント會議に於て定められたカトリック正典はヴルグタ (Vulgata) である事は云ふまでもない。

律法、預言、聖文學と黙示文學は夫々の時代に結集された事も舊約聖書の常識であろう。ここに以上の四つの成立年代に就て略述しよう。

律法の成立は前五世紀の末、預言書の結集は前三世紀の末から第二世紀の初。聖文學は第一世紀の末葉。黙示文學は第一世紀の後期と見做すのは恐らく正鵠を失しない見解であろう。

舊約聖書の各部分は以上のようにしてその結成を見た。では舊約聖書は如何に性格づけられるべきであらうか。既に明にした様に舊約聖書の各部分はその構成年代を異にしている。それと同時に各書の著者も亦雑多で

ある事も注目されなければならぬ。従つて舊約聖書は一つの叢書と云ふべきものではなからうか。

これは一概にユダヤ教の教義とは云われぬ。或る意味に於てこれはイスラエルの民族史とも言えるだろう。或はイスラエルの文學とも呼ばれて差支へないであろう。他の意味に於てはイスラエルの法典でもあり得るであろう。併し舊約聖書は總括して定義するならばイスラエルの宗教文學と名付けるのが適當であろう。

この事は舊約聖書がイスラエル民族史として第一史料に値しないとの意味であつてはならない。舊約聖書はイスラエル民族史ではない併しそれは舊約聖書はイスラエルの精神史として最高の資料ではあるまいか。そうしてイスラエルの精神の展開の跡付けは律法、預言、聖文學と默示文學を標柱にし進られるのが順當なコースではなからうか。筆者は如上の見地からイスラエル民族の精神史の展開の素描を試みよう。

律法時代に於てイスラエル民族が統一の自覺に到達した。此の時代にイスラエルの神ヤーウェが部族的性格を脱し民族神に高められた。他面ヤーウェの地方的分散的な禮拜が中央的統一的な神禮禮拜になつた。律法の中心をなしたものは申命記であつた。

預言時代はイスラエル精神が昇華した。ヤーウェは此の時代民族神から世界神、自然神から人格神へと神觀の飛躍を示した。律法時代の律法は此の時代に至つて深化され靈化されるに至つた。預言の最高潮はエレミヤ記と第二イザヤに指が屈せられるのではあるまいか。

聖文學の時代に至つてイスラエル精神は沈潜した。これは自己懷疑の時代で預言者は攻勢一踏であつたのに引替へ守成の一手を操つたのは此

の時代の姿ではなかつたか。人はかかる時代の代表的作品として詩篇を擧げる事を許されるであろう。

默示文學時代はイスラエル民族の絶望時代であつた。かかる時イスラエル民族の關心は現在への決断ではなく寧ろ未來への待望であつた。默示文學の記者たちは此の時代に於て曾ての預言者が同胞に果たした役割を新に演じたのであつた。ダニエル書は默示文學の代表的なものである事はここに贅言するまでもなくそれが正經に收められた唯一の未來文學である點から容易に首肯されるであろう。

註一 Lxx (Septuagint) 七十人譯

註二 第二イザヤ。舊約聖書イザヤ書第四〇章—五五章

(二) ダニエル書の著者とその時代

以上筆者は舊約聖書の成立課程に於てイスラエル民族精神史の展開を素描しこれによつてダニエル書の舊約聖書に於ける位を明にした。イスラエル民族の精神史は併し世界史の一環として把握されなければならぬ。凡そ世界を離れて民族が存在しない事はここに改めて云ふまでもないが、この事は殊にイスラエルの場合はその民族史は世界史との關連を離れては論ぜられないであろう。筆者はここにダニエル書に必要な限りイスラエルを繞る古代東方史に一瞥しよう。ダニエル書の卷頭はユダヤの王エホヤキムの治世の第三年、バビロンの王ネブカデネザルの名を以て始つてゐる。序にバビロンのエルサレム包圍は前六〇五年。そうしてエルサレムは前五八六年に陥落した。イスラエルのバビロン捕囚は四十七年續いた。バビロンは前五三九年にペルシャ王ク羅斯 (Kyrus) に

滅ぼされた。第二イザヤは此の時代の預言であつて、クロスはヤーウェの受膏者の名で呼ばれている。(第四十五章、一)

ペルシャの支配は約二百年続いた。前三百三十三年マケドニアのアレキサンドロス大王はギリシヤ本土を統一して更にその餘勢を東方世界統一に向けた。アレキサンドロス大王の治世は併し彼の死後十人の後継者(Diadochoi)たちの分争によつて分裂の悲劇を見た。この十人の後継者たちは二十年の分争を経てイブソスの戦に至つて終止符を打ち四王国に定立する様になつた。因に四王国とはカッサンドロ、リスマコス、プロマイオス、セレウコス。

此の四大王國の中直接ダニエル書に關係のあるものはプロトレマイオスとセレウコスとの二王國である。イスラエルはプロトレマイオスとセレウコスとの中間に位し兩王家に朝貢していた。併し前一九八年にセレウコスのアンテオケ三世が埃及をバニスに破つた。以來パレスチナ全土はセレウコス家に歸した。セレウコス家のイスラエルに對する政策は寛容であつた。併しアンテオケ四世(一七五—一六四)が即位して對イスラエル政策は俄然急轉回をした。彼は汎ギリシヤ主義者の代表的なものであつた。

彼はイスラエルのギリシヤ化にイスラエルの信仰の自由を拘束した。そうしてイスラエルの神殿にゼウスの神を代置させた。ダニエル書は此間の消息を「彼より腕おこりて聖所すなわち堅城を汚し常供の物を撤除かせかつ殘暴可惡物を立てん」ダニエル書一一、三—

イスラエルの歴史は被壓のそれである。イスラエルの被壓の民として苦杯を嘗めつくしたのはこれが極致ではなかつたらうか。

ダニエル書にあらはれた歴史哲學

是艱難の時なり國ありてよりその時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべしダニエル書一二・一アンテオケ四世はイスラエルの民族の敵愾心を煽つた。そうしてその團結を強化した。斯くしてマカビー(Maccabees)家が獨立した。事の次第はマカビー第一卷に詳記されている。尙おマカビー(Maccabees)家の獨立は前一六七年であつた。ダニエル書は恐らくアンテオケ四世の死とマカビー家の獨立の間に書かれたのであろう。ダニエル書の書かれた時代的背景は以上を以て終えたい。では次にダニエル書の著者は誰か。

これは舊約聖書批評學者の間に論争を醸して來た。保守派と呼ばれるパーセー(Pusey)及びウイilson(Wilson)は著者ダニエルの歴史性を主張し之に對しドライヴァ(Driver)チャールス(Charles)はダニエルの歴史性を否定している。

ダニエル書はヘブル語とアラム語とによつて書かれ他方本書は第一部(二章—六章)はダニエルの傳記であり第二部(七章—十二章)はダニエル自身の發言である事を發見したのは遠くはスピノーザ、ニュートン、近くはアメリカのモンゴメリー(Montgomery)である。モンゴメリーは本書の二重構造を有する所から著者の二人性を主張している。ダニエルの歴史的實在は確證しがたいであろう。默示文學は一方偽名の下に編述されているのはダニエル書ばかりではない。ダニエルは原始セム族の代表的人物ではなかつたらうか。

註一 ダニエル書七七、十の角の獸

註二 ダニエル書七、一七

註三 ダニエル書一一、一一—一四

註四 エゼキエル書一四、二〇

(三) ダニエルの人間像

ダニエルは実在の人物ではない。それは黙示文學の様式である偽名記者である。そして其の偽名の由來はセム族の傳承的人物である。

次にダニエル書の二人性は如何に考えられなければならないであろうか。前述した様にダニエル書は二種の構造を有つている。第一部はダニエルの傳記であり第二部はダニエル自身による異象の解明である。一方第一部の時代はバビロン王ネブカデネザルベルシャザール、メデヤ王ダリヨスであり第二部はバビロン王ベルシャザールメデヤ王ダリヨス、ペルシャ王クロスに亘つている。此等の相違から著者の二人性も首肯されぬのも無理からぬのであろう。併し筆者の推定が許されるならばダニエル書の著者は一人に還元されてはいけなからうか。モーセの五書に^{註一}J文書がありまたE文書が混在するのは人の知る所であらう。J文書と^{註二}E文書とか併し同一の編者の意向によつて配置された事もここに明にするまでもないであらう。此はダニエル書に就いても同様に云えないであらうか。ダニエル書は黙示文學である。文學に於て意圖されるものは表現効果である。ダニエル書に於てダニエルの生涯を誌したのはダニエルの讀者への紹介ではないか。ダニエルの巧な紹介はダニエルの發言に權威を附加する結果とはならないか。

ダニエルは云はば時代の理想化されたイスラエルの人間像であつた。彼の生涯はバビロン王ネゴガデネサル^{註三}のバビロン捕囚から始つた。彼の生涯は迫害の連続と云つて差支がない。彼は併し此の迫害を克服し

た。そして異邦支配の下にあつて顯官に陞り天壽を完うした。上に記した様にアンテオケ四世の迫害はイスラエル民族に取つては有史以來の出來事であつた。彼の迫害は水も洩らさぬ慎重な計畫を以てイスラエル民族の外的生活から精神生活まで滲透させられた。

^{註三}ダニエルに臨んだ迫害はギリシヤ的享樂主義のイスラエルの禁欲主義への挑戦に始つた。一方ギリシヤのイスラエルへの挑戦は東方の君主禮拜とヤウエ信仰の對立激化であつた。斯る迫害下にダニエルは信仰による勝利を得たのであつた。かかる意味に於てダニエルは誠にイスラエル人の中のイスラエル人であつた。ヤウエ信仰に於ける理想像はダニエルである。ダニエルの迫害に對する勝利はヤウエ信仰であつた。ダニエル書を貫く基調も亦之である。併しダニエル書はダニエルを智者として描いている。ユダヤ人は微を請ひギリシヤ人は智慧を求む。(コリント前書二、二二)イスラエル對ギリシヤの鬭争は信仰と智慧とのそれであつた。

殊にアレキサンドロ大王の東方征服以來ギリシヤの智慧がイスラエルの信仰を壓倒した。^{註四}箴言傳之書。^{註五}ヨブ記—此等の三つは智慧文學と呼ばれているこれ等はギリシヤ文化に對するイスラエルの解決の記録である。

箴言は處世哲學である。ソクラテスが對決を挑んだソフィストは其后如何に歴史に役割を演じたであらうか。因にソフィストは技術の傳達者である他面處世術の體得者であつた。處世は臨機應變の叡智を必要とする。ここに處世は時に便宜主義に墮せざるを得ない。箴言の作者はエホバを畏るるは知識の本なり(箴言一、七)の一語によつてソフィスト的處世哲學を克服した。ダニエルは顯官の位に登り、名聲を博した。彼は箴

言的處世人ではなかつたか。

傳道之書は人生哲學の名を以て呼ぶのは不可であろうか。明朗清澄—これはギリシヤ民族の特質である。ギリシヤ人は併し憂鬱な性格を包蔵している事も亦争はれないであろう。

人生の空を觀じたのは傳道之書の作者であつた、併し彼はかかる人生の虚無に對し辛勝した、即ち「汝の少き日に汝の造主を記憶よせ」(傳道之書二、一)

ダニエルは人生の空を克服した。彼は復活の寸光を擱んだ舊約人であつた。

ヨブ記は云はば運命哲學と稱えて差支ないであろう。運命の盲目は人の善惡の種類を區別しない。否幸不幸は善人と惡人に逆比例する。

これに對する解決はイスラエル民族の苦難と共に切實なる民族の要請となつた。ヨブ記の取扱うものは斯る深刻なテーマである。

この解決は理論の形態を執らなかつた。それは唯一瞬の見神の體驗に於て結束した。

ダニエルは斯る意味に於ても亦智者であつた。斯くダニエルは處世。人生。運命に對する智者であつた。ダニエルの智者たる所以は併し以上の三つに盡きなかつた。ダニエルは夢を解く者異象を明す者であつた。彼の夢の解明異象の釋義は何を意味したか。それは後に明にされる如く世界各國に於ける興亡の予言であつた世界歴史の中心は何か。これは歴史のアルファでありオメガでもあろう。他方これに對する答は夫々古代、中世、近代の歴史の在り方を決したのであるまいか。古代に於ける歴史の中心理念は何であつたか。それは政治ではなかつたらうか。古

ダニエル書にあらはれた歴史學哲

代に於て歴史と政治とは同義ではなかつたか。そうして古代に於ける最高の智慧とは政治に關するものではなかつたらうか。

古代東方に賢者と呼ばれる一群があつた。彼等も亦政治の解明を志さすものであつた。プラトンの哲學は國家論に於て昇華し、アリストテレスの哲學は政治論に於て其の面目を躍如させるとすれば彼等は政治哲人と呼ばれるべきであろう。ダニエルは斯くイスラエルの舊約時代の政治哲人であると斷言する事は冒險であらうか。

古代東方は君主禮拜が強要された。王子は神の化身であつた。彼等の歴史は從王國の制約を受けていなかつたか。

プラトンは熱烈な愛國者であり、^{註七}アリストテレスは冷靜なる政體の批判解剖者であつた。併し彼等の國家の理想像は古典ギリシヤ時代の都市國家(Cities)の彼方に及ぶ事が出来なかつた。彼等は別言すれば内ポリス的哲人であつた。ダニエルは亡國漂流のディアスポラ(Diaspora)おうであつた。彼は世界をば常に對象として觀照した。彼は對世界の立場をとつた。

彼は歴史哲學者に應はしいものは正に此點に於てである。(未完)

註一 J. 文書 Yauveh 文書 R. Driver: The book of Genesis "Introduction"

註二 E. 文書 Elohim 文書 R. Driver: The book of Genesis "Introduction"

註三 ダニエル書一章

註四 原名 Mithie Shelano

註五 原名 Kohelath

註六 書名と主人公名とが一致している。

註七 The Politics of Aristotle; translated by William Ellis